



K i t a K i
t a 物語



光野 朝風

目次

序	1
第一話「花喰い」	5
第二話「写真家の感性」	8
第三話「恋桜」	11
第四話「最後の鰻」	13
第五話「濃霧のモノレール」	15
第六話「第二の結婚式」	18
第七話「幻の煙」	22
第八話「ゴッホの肖像」	25
第九話「才能」	27
第十話「野焼き」	30
第十一話「にやるようににやる」	32
第十二話「戸畑城陥落！」	34
第十三話「待ち合わせ」	36
第十四話「善と悪」	38
第十五話「「檸檬」のある景色」	40
第十六話「夫婦喧嘩と一人酒」	42
第十七話「2736KitaQCity」	45
第十八話「夜間飛行」	47
第十九話「誰かさんと誰かさんが麦畑」	50
第二十話「プライドと生き様」	52
第二十一話「無邪気な夢を見る時間へと」	54
第二十二話「新設はねじれを生んで」	56
第二十三話「向こう岸までが遠く」	58
第二十四話「門司港駅の怪人」	60

序

「旅人」と「旅行者」はどう違うのかを考えていた。

辞書の意味は当然同じだ。「旅人」については「たびにん」と読むと「ばくち打ち」や「香具師」の意味が出てくる。

「香具師」は「的屋」とも言うが、今じゃ「的屋」なんていうと、祭りに出てくるちょっとヤクザっぽい顔つきの人がたこ焼きや焼きそばの屋台をやっていて、なんていうイメージがあるけれど、有名どころじゃ「ガマの油売り」などがある。

それじゃあ昔、「ばくち打ち」や「香具師」はどういう嗅覚をしていたのだろう、なんて思いを馳せると面白い。

当然人の心に入っていく話術や技量、人を見抜く目が必要だっただろう。ようは自分の目的に合った情報を引き出せる相手を、見知らぬ地で見分ける技術が必要になったはずだ。それはもう、ただやればいってもんじゃない。経験と勘がものを言う。外の情報を語る能力も必要だっただろう。

現地の人にとって土地は全て繋がっている。つまり毎日行き来している場所があり、現代において例え職場と家の点と点の往復であろうと、生活区域であるから歩いて寄り道したり、新しい店を見つけたり、私の場合は飲み屋を探すけれど、そういった個人の生活に密着したもので場所場所として散らばっている点が面となってくる。

現地の人しか知らない道や店や味や景色や人が結ばれて地域や土地が、その人の中で出来上がってくる。

そんな現地の人の心をなぞるかのように道を行くのが「旅人」なのではないのか。

対して「旅行者」は、まったくの他者として存在する。

どこに、何があるのか。

その情報は現地の人の声やふれあいの中で見つけるのではなく、雑誌、ネット、うわさ、テレビなんてものが絡んできて、まず行こうとするのは「有名な場所」だろう。

星で言うと一等星を目指すわけだ。

この一等星が点として存在して、点と点を飛んでいく。

それはツアーだったり、個人で来たってバスや電車や車だったりする。

人から情報を手に入れようとする前に、写真や文字や酷い時は芸能人やらを参考にして、お目当ての点へまっしぐらだ。

その間に存在する諸々のものは無視され、目的のものを手に入れて異国情緒のようなものを楽しむ。

それが「旅行者」だ。

「旅人」はどうするだろう。

独自の嗅覚を利かせて、人に入り込み、「あんたがいなくなるとちよいと寂しいじゃないか」なんて言われたりするような立ち振る舞いをしていく。

食べ物一つに歴史を感じたり、人の言葉遣いや立ち振る舞いに人生を感じたり、当事者ではない気軽さと、当事者かのような想いを巡らせて、新鮮さと好奇心と思いやりをもって土の上に立つ。

そういうのが「旅の達人」なんて気がしている。

その旅人の中には現地の人間とはまったく違うものが存在しているし、存在していく。

心の中には「旅人」ゆえの「創造性」がある。

「相談がある」と声がかかり、ほとんど十年越しの文章の依頼。

一度も会ったことがなくとも写真で顔だけは知っている。白髪が増えたが、色々な意味で相変わらずだった。

札幌と北九州。日本地図で言えば極端に北と南。出会うはずのない二人がやりとりをしている。ネットというのは人の繋がり方を変えた。

本来は、人もまた、土地、土を形作る景色であったはずだ。繋がり方が変わったせいでぐちゃぐちゃになりはじめているが、何かを感じ、気温も景色も文化も人柄も違う土地で息づく人たちが、その感じた全てを表現しきったのが、その土地だ。

何が一番惹かれるだろう。景色だろうか。人だろうか。

作家など、名乗ってしまえばいい。十年以上前から作家だと自負してきた。すると、どういうわけか、たとえ出発点が素人でも不思議と十年の歳月は形を作ってくる。小説家は勝手気ままなものだし、自由な気持ちがないと出来ない。ようは、人にこうだと見られる前に、そこへ飛び込んでしまえばいい。そうして接してきた全ての人たちが私を作り今出来上がっている。

だから作家たる私は人に惹かれ、人の愛した景色を愛する。

そしてまた「コイツは面白い」と覚えていてくれて声をかけてきた存在に対し、快く旅路に出かける準備を始めている。

年齢の上ではその人はおじさんからおじいさんになり、私もまた若者からおじさんになった。

私はその「旅情」を彼が積み上げてきたものの中に見ていこうと思っている。

人の心を旅するのもまた「旅情」なのだから。

第一話「花喰い」

「春先」も「寒波」も、まるで感覚が違う。

「赤カブの花が咲いた」と彼女は言った。

一体ここではいつが「春先」なのか。

桜は五月頭に咲くけれど、ここでは二ヶ月前に散っている。

「寒波」なんて言えば、積雪五十cmは普通のことだし、「しばれる」というくらい肌が凍ったように突っ張って痛くなる。

でもここではそれはないのだ。

きっと、桜が咲く三月に入り始めると「春先」なのだろう。

こちらは雪解けが進んでいくほどの気温になれば「春先」なのに。

「本当に来てくれたんだね」

「ほら、最近は飛行機も安くなったから」

運賃の安さは距離をも凌駕する。今までチャットや音声通話でしかやり取りしていなかった人が、近くなった。それは嬉しい。

だが、急に会いたいとせがみだしたことに違和感を覚えていた。

「海が見えるんだよ」とは言っていたが、空港まで迎えに来てくれて嫌にはしゃいでいる彼女に連れられ、会津若松くらいしか知らなかった自分が福岡の若松に来ている。

確かにここは海の匂いがする。

自分と会えた事が嬉しいのか、何かいつもと違うような気がしたけれど初対面だし何も言えずにいた。

畑つき木造二階建ての家に着く。家族と住んでいると言われただけに引け目はあった。

恋人でもないし、友達と言っても初対面だし、両親にはどう言ったらいいのか躊躇するところはある。

「今お父さんとお母さん海外旅行中なんだ。だから今しかないと思って」

畑には菜の花のような花が咲いていた。赤カブの花らしい。観光をするわけでもなく、夕方から酒とつまみとを挟んで、妙に高揚している彼女と居間で喋りながら、ついに宵を迎える。

男の身としては、いや男代表というわけではないが、やはり期待はする。

両親のいない間に秘め事を二人の間で抱えるのも悪い話ではない。

残念ながら部屋は別々だった。二階にある彼女の部屋を見せてはもらったが、やはり女の子の部屋だ。匂いが違う。色使いも違う。正直、それだけで疼くものがある。

襲って嫌がられても困るので大人しく寝ることにしたが、夜突然けたたましく床を駆ける音がして、部屋の近くのガラス戸が開いた音がした。

異様な空気に体が多少震える。勇気を出して部屋のふすまを開けると畑に続くガラスの引き戸が開け放たれている。

そして畑の中で何かが動いているのを感じ携帯電話のライトで照らしてみると、犬のように四つんばいになり赤カブの花を貪っている彼女の姿があった。

喉が一瞬にして渴き、心臓に亀裂が走る。声が出ない。

違う人間かもしれない。彼女のわけがない。

だけど、「それ」は振り向き、僕の名前を呼んだ。

靴を履かぬまま急いで駆け寄り彼女を抱きしめる。

「どうしたんだよ。何してるんだよ」

「花は！ 花は命を繋ぐものだからぁ！」

ぞっとした。恨みとも悲しみともつかぬ、おぞましい声が響いたように感じた。

「私、子供産めなくなっちゃったんだ。子宮筋腫で。全摘出することになって」

彼女は僕の胸倉を掴み、泣き崩れる。

会いたかった理由はこれだったのか、と直感した。一人で抱えるには辛かったのだ。

いつ、とも聞けない。辛かったろう、苦しかったろう。言葉を出そうにも及びもつかない。自分の体を寒気だけが爪を立てて引っかいている。

年頃の年齢で、希望の一つが失われたことを理解することは難しい。

男と女では、何もかも、感覚が違う。

それは僕と彼女が北と南でお互い離れて住んでいることぐらい、全てにおいて感じ方が違うのだ。

僕はただ、折れてしまいそうなほど抱きしめるしか術を持っていなかった。

目の前にはいくつかの喰らい散らされた赤カブの花が赤く染まった月に照らされていた。

第二話「写真家の感性」

高梨写真スタジオの高梨徹は魚町銀天街の西側、柴川添いに店を構えていた。

今は携帯電話やデジタルカメラが日常のものとなり、皆が写真を撮るようになったため、スタジオだけで食っていくには厳しく、結婚式や各種催事への出張等で凌いでいた。

たまに個展を開いたり写真集を出したりするが、生活の足しになる程度だった。

高梨は昼休みには必ず小倉城へ散歩に行く。

スタジオから歩いて十分ほどで着くし、季節の移り変わりがよく感じられる。

なにより街の中にある城という違和感が、疲れてくる心を現代の時間から解き放ってくれるようで好きだった。

城のすぐ傍にある庭園へも足を伸ばすことがある。

入場料金を払って池や庭を見ながら一ヶ月に数度ぼんやりするのだ。

この行為は高梨を「意味」から解き放つものだった。あらゆる情報が溢れている現代の中で、自分の感性を取り戻すためには言葉から解き放たれる必要がある。ただでさえ何かを考えている。世界が、政治が、事件が、地域が、思想が、写真がと、言葉や意味で頭が凝り固まってくると、直感が鈍るのは何度も経験していた。

何かを伝えようとする。だけれど写真に意味を込めようとする途端に陳腐になってくる。そこにある。確かに存在する。存在しているのを人は頭で整理して意味づけをしていく。高梨は人が意味づけする前の写真を撮りたいのだと、ずっと思っていた。考えるよりも前に感じているからこそ心に訴えかけることができるのだと。

今日は庭園の池を眺めていた。濁った緑色の池には白色に赤いぶちが入った鯉が泳いでいる。

水面には小倉城が映っている。

すぐ近くに市役所のビルや複合施設などがあるため、高い建物に囲まれると池に隣接している書院造の木造も小さく見えてきて興を削ぐので鯉や水面に集中する。

木の葉が落ちて水面をざわめかす様子をじっと見ていると、高梨の心は吸い込まれていく。

まるで鏡を境にした向こう側へと行ってしまうかのように。

鯉が空気を吸うため水面で口を開ける。現実が少しずつ開けられた口へと落ちていく。

鯉が澱みを掻き分けていく。切り裂いていくように泳ぎを速くし、縫い合わせるように遅く浮かぶ。

雲が少し入ってきたようで日光を遮る。一瞬曇ってから晴れて強い光を鯉へと突き刺す。

鯉の白い鱗が一瞬光ったように見え、水面が割れる。無数のひし形の欠片に水面が変化して割れた先に別の世界が見えてくる。

水面を蹴る尾びれが水しぶきを跳ね上げ虹を起こす。

風が吹き体が溶け、水の中へ自らの体は砂のように吹き付けていく。

傍にある針葉樹の苦い香りが腹の奥へと落ちていく。

いつの間にか池と一緒に揺れている。微かな水面の揺れも逃さず。

ありのままに、意味も含まず、ただ感じるままに体を慣らしていく。

呼吸を整える。体に無理なく、焦らず、よく空気が内側に馴染んでくるように。

そしてよく吸い込んで息を吐いたところで鯉をもう一度見つめる。

鯉が音を立てて深遠へと消えていった。

澱みの深いところから、静かな声が聞こえてくるようで、覗き込みたくなかったが、強い南日に遮られた。

水面が光を反射させて書院造の建物を照らしている。

「さてと……」

高梨は深く息を吐いて白く眩しい小倉城を見る。

「昼飯何にしようかな」

持っていたデジタルカメラの中には無意識のうちに撮った何十枚もの鯉が収められていた。

第三話「恋桜」

右の乳房を左手で添えるように持ち上げる。

貯水池に映りこむ桜のまあるい木が桃色に染まり、花卉をひとひら水に添えて波紋を広げ散らせる。

ぐっと指に力を入れて乳房を握ると吐息が漏れる。

そよ風が吹き、またひとひら。右親指を唇の紅に当て、爪を噛む。虚ろに開いた唇の奥に指を入れたくなるのを抑える。

まるで池に浮いているかのような桜の木は、周囲の色づきよりも真っ先に咲き乱れている。

昨日まで何も知らなかった私が知った肌。色づき咲いた熱と疼きに冷えた池は指先から震えを伝えてくるようで、怖くもあり、気持ちよくもあり。

あと一週間もすれば水面に浮かぶ無数の花びらを眺めることになるのだろう。

春の毒を受けたように散っていく桜の花は、燃え上がる恋のよう。

何かを紡ぐことはなく、積みあがっていくこともなく、答えが見えてくるわけでもなく、染まってなかったかのように消えていく。

首筋を指先でなぞり、鎖骨を滑っていく。乳房はすぐそこに。右の乳房には一つ、あなたの口づけの痕が花卉のように残っている。

今の私は微笑んでいるのだろうか。澄んでいるのだろうか。悲しい目をしているのだろうか。

汚れたようにも、生まれ変わったようにも、美しい感激に喉が締め付けられているようにも感じている。

手を伸ばしても空を切り、声を出しても溺れていきそう。

何かを知ったふりをして、感じた高揚に羽ばたけるような気がして、大丈夫だよと言われて、かわいいねと言われて、綺麗だよと口づけをされ、覚えていくのは永遠への感触よりも、失っていきそうな不安。

水の上を歩いて、あの桜の下までいき、水の上から見上げられたら、どんなに素敵なんだろう。そんなことは命あるうちは叶わないこと。

好きや愛しているが咲き乱れる。

両手で自分を抱きしめる。目を閉じてまぶたの裏にまあるい桜の木だけを切り取って映しこむ。心の内側、延びてくる波紋。ゆっくりと降る雨のような桜の花弁たちは、いくつものゆらめきを作って、足元へ歩み寄る。

目を開きたくなくなる気持ちをぐっと堪え、脳裏まで染みていきそうな桜の映像を打ち切って、再び池の桜を見つめてみる。

何のために、誰のために咲き乱れるの。

儚き花は心に消え残り、感触も残さず、微かに香ったかのように移ろっていく。

私があなたに抱かれて得たものは、まるで一瞬の桜花の移ろい。

恋桜。

第四話「最後の鰻」

「明日だったらエイプリルフールだったのになぁ」

常連の蛸名は冗談とは裏腹に神妙な気持ちだった。

明日には閉まる若松丸仁市場の中にある鰻を焼いている店の年老いた女将に声をかけた時、頭の中を思い出が駆け巡る。

いつものように年季の入った鉄製の四角い練炭コンロの上で、鰻の油がよい香りを上げている。

「うなぎ」と書かれた暖簾は焼かれた鰻の油のせいか、だいぶくすみ、店内も年月以上に燻されている。

その様子を蛸名は名残惜しみながら見回した。

魚介類を売っていて、鰻は持ち帰りのみで売っている。国産の鰻は絶品で月に一・二度は贅沢のために、買っていた。就職してからずっと通いつめていた店だったが、ついに年度末で閉店だと言う。

右も左もわからなかった安月給の若い頃でも「俺は出世するのだ」と無理をして買い続け、ようやく無理もなく買えるようになってきたというのに二十年近く馴染んだ味が消えてしまうことに、名残惜しさよりも、青春の一ページの喪失感の方がはるかに大きかった。

市場の移転先は決まっているのだが、年のためか、これで店仕舞いをすると言う。

蛸名は「申し訳ないが、最後閉店するところまで見届けたいんだ」と申し出ると、快く女将も大将も「何もありゃしないよ」と快く受けてくれた。

せっかくの焼きたての鰻が冷めてしまうが、帰るまでに三十分近くかかる。

どうせ冷めてしまうのだから、最後の姿くらいはゆっくり見納めておきたいという気持ちがあった。

いよいよ片付けともなろう時間になったが、いつもの様子なのだろう。

ただ淡々と片づけをしている。

明日また店を開くのではないかというぐらい何の感傷も見当たらない。

長年の癖がそうさせるのか、それとも感傷に浸らないようにしているのか。

きっと身に染み付いたことを繰り返しているのだろう。その上で長年変わらぬように素材を見抜いて、魚や鰻を出していたのだろう。

鰻は時価ではあったが、三千円ほどで出されていた。

最後に買った鰻も、その値段だった。懐に入っている万札の数枚を置いていきたい気分にかられたが、堪えて請求通りの額面をきっちり払った。

女将さん、俺、明日から部長に昇進なんだ。新規事業の頭を張ることになるんだよ。

伝えたかったが、その言葉さえも飲み込んだ。

失うものを、取り戻せるものでもない。

「何かを得たつもりでも、消えていくものがある。寂しいものだな」と思い、蛭名は礼を言って最後の鰻を持って店を出る。

小学六年になる一人息子に昔話と共に食わせてやろうと心に決めて。

第五話「濃霧のモノレール」

鉄道の路線は数えられないくらい日本国内にあるというのに、地下鉄やモノレールや路面電車は国内に数えるほどしかない。

その中のモノレールの一つなのだという事は大人になって初めて知ったのだが、生まれ育ち、ほぼ北九州市をあまり出ることはなく、福岡県外に出たことなどまったくなかった武士は霧の中をふらりふらりと揺れるように歩いていた。

タケシと名付けられ漢字も雄々しさを込めて父からつけられた名だったが、いつも何かに脅えるようにおどおどして、そのことが逆に根っからの九州男児の父の逆鱗に触れ、厳しく叱られない日はないほどの子供時代を過ごし、大人になってからも、下から人の顔色を伺うような上目遣いで人と話し、目が合うとすぐにそらすような付き合いづらい男であった。

当然友達も知人もいないと言っても過言ではなかったが、仕事は黙々とこなし、また性格が元々細かなところがあるのかミスなどもまずなく、かといって出世することもなかった。

そんな男でも趣味はあった。競馬だ。

始まりは小さな頃に見た戦国歴史ドラマだったが、合戦中の武士を乗せている馬の力強さに見入られ、実際に競馬場に足を運んだ時、競走馬の美しさの衝撃に全身が震え足がすくむほど感動したのだった。

それから競馬場通いをするようになった。

中学三年から地方レースのある週末は競馬場に通うようになり、ついに二十歳で馬券を買ってから三十三年という月日が経ったが、仕事も性格も交友関係も相変わらずだった。

変わったといえば、父が四年前に亡くなり、母一人となったことぐらいだった。

そんな人生を過ごしていた武士が、跨座式モノレールに小倉駅から乗り込んだ時に異変は起こった。

急に濃霧に包まれ一寸先が見えないほどになった。気がつくと車内には誰も乗車していない。競馬場の会場時間午前九時に着くように乗ったはずだから、今の時間帯は乗客が皆無なのはあるにない。濃霧自体も珍しいことだ。

小倉駅を出てしばらくすると武士は不安になった。もう十分も経っているのに次の平和通駅に着かない。競馬場前駅に着いてもいいくらいだ。もしかして運転手のミスか。回送列車にでも乗り込んでしまったのか。多少の苛立ちも出てくる。乗降口の窓に張り付き濃霧の先へと目を凝らすのが押し迫ってくるような深い霧が眼前にあるだけだった。

「あっ」と小さな驚きの声を武士は上げる。馬がモノレールと一緒に並走している。筋肉のしっかりとした黒い馬が虚空を蹴り上げ後ろ足の筋肉の筋を閃光のようにくっきりと盛り上がらせ艶めかせている。

前足で着地し、飛ぶように後ろ足で蹴り上げる。隆々とし、整った筋肉が躍動している。あれは正真正銘のサラブレッドだ、と武士は思った。もはやモノレールから見えていることや、濃霧の中で光景がはっきりとしていることなど気にもならなくなっていた。

人と接することがほとんど出来なかった武士が唯一生き活きと自らの命を重ね合わせ興奮することが出来たのが馬だったから、もはや他のものは目に入らなかったのだ。

当然車内アナウンスが六駅も飛ばして競馬場前を告げたことにも気がつかなかった。武士は開いたドアから馬を追うように走り出て行って光の中へ消えていった。

その日の午後、武士の母の元に警察から連絡が入った。後日の司法解剖の結果大動脈瘤剥離だったという。ただ不思議だったのは競馬場の開場時間が九時にも関わらず濃霧が出ていた三十分の間に乗り込み競馬場前で倒れていたということだ。濃霧の出ている時

間は、ほぼ始葬六時過ぎから半までだという。

葬儀会場で武士の母は悲しむようなことはなかった。衝撃の大きさからか周囲は思っていたが、違う、と言う。

夢を、見たらしい。濃霧に包まれた中、息子が父を追いかけモノレールに乗って霧の向こうへ消えてしまった夢だったのだと言った。

第六話「第二の結婚式」

「ちょっと運転しろ」

「え？」

夫、将和の言葉に妻の響子は驚きの声を上げた。

「でも……」

「運転できるくらい体力が残ってないんだ。頭はぐるぐる回っているのに、体が動かん」

「はい」

「女に運転は任せられん」と、一度として運転をさせたことがなかった将和が初めて響子の運転でドライブに行くのだから、響子の驚きも無理はない。

単身赴任五年目。海外にも行くことが多い。家に帰ってくるごとに言葉や顔つきが厳しくなってくる将和を心配していたが「お前は余計な心配をせんでええ」と突き放されるばかりで、結婚生活十二年目、絹婚式を迎えるのに心の奥には入っていけずにいた。

助手席に座る時「っああ……」と疲れた溜息をどっと吐く。そして閉じた目を深呼吸をしてから開き、シートベルトを締める。

これほど疲れ果てた姿は初めてだった。

「響町に風力発電の風車があるだろ。そこへ行こう」

「はい」

車で二十分ほどの時間だったが、将和は少し寝ているようだった。

察しはついた。新聞でも一面トップで経営悪化による大規模リストラが行われることが載っていた。将和の勤める大手の会社。三万人が整理されるという。

将和の友人の妻伝いで聞いた話によると、社内の様子は劣悪だと言う。

既に再就職先を斡旋する新規子会社も出来上がっているらしいが、大手でさえ新聞通りの有様なのだ。よい条件の再就職先などは期待できないだろう。

白島フェリー乗り場の駐車場につき、休ませてあげようと響子は黙っている。

「ついたのか？」

「あ、ええ」

「着いて来い」

歩く姿はいつも通りだったが、気張っているのは充分に見て取れた。

響灘には十基風力発電の風車が回っている。穏やかな海だった。少しずつ沈みゆく夕陽と、少しずつ大きくなって迫ってくる月の両方が空に映りこんでおり、幻想的だった。

同じものを見ていたのだろう。

「どちらが太陽ということもないのだろうか.....」

太陽がなくて月は輝かない。常々「お前は俺なしでは何もできないだろ」とモノを言われてきた響子には将和が全て言わずとも何を言わんとしているのか理解できた。

まるで別人のような夫が傍に居る。どうしていいのか戸惑うほどであったし、何かしたいと気持ちばかりが空回りするばかりで伸ばそうとする指先が震えた。

この場所に連れてきたのも、自分の名前に懸けたからなのだとわかった。

「子供……欲しいって言ってたな。二人……」

背中を見せ続ける将和がハッキリと言葉に出したのを聞き逃さなかった。

結婚前も結婚後も仕事に忙殺され疲れ果て夫婦の営みどころではなかった。疲れては泥のように眠り、上司や取引先の付き合いでは遅くなり、まるで止まると死んでしまうかのように働いていた。子供が欲しいと言ったのは結婚前の言葉で、覚えているとは思わなかったのだ。

響子は目の前の太陽が一瞬輝き沈み行くのを瞳を潤ませ眺めていた。

「あ、あの……」

細波のような声の響子。

「なんだ」

振り向かない将和。

「触れても……いいですか……？」

月光を受けて白く消え入りそうな手を伸ばす。触れられれば肩でも背中でも、どこでもよかった。

振り向き手を引き寄せ口づけをしてきた将和。響子は瞳をぐっと閉じると涙が頬を濡らした。出産への絶望的な重みに苦しんでいたため、想いが堰を切ってきたのだ。

「俺は北九州に帰るよ。ここで、再出発する。一緒に居てくれるか？」

将和の瞳を見つめながら手を捜し、指を結んだ響子は力強く返事をした。

まるで、第二の結婚式だった。太陽と月が織り交じる場所で、新しく生まれようとする二人のことを胸の奥で感じていた。

あの景色は、一生忘れない、と響子は心に誓った。

月の光は絹を広げたように二人を夜空の下で彩っている。

第七話「幻の煙」

胸がどす黒くぬめっていくようだった。

一度抱いた憎しみは、どうすれば晴れるのだろう、とバーボンの入ったステンレス製のボトルを片手に中瀬は夕陽を見ていた。

工場地帯の煙突から出る煙に太陽が焼き付けられている。やがて煙に押し込まれ夜が来るだろう。

空の雲でさえ煙のように思えてきた中瀬はボトルのキャップを勢いよく開けて中のバーボンの半分を飲み干す。

期間労働者として工場で働いていたが、先ほど解雇された。ただやめさせられるぐらいだったら中瀬も酒を片手に夕陽を眺めたりはしなかっただろう。

趣味があり、スケッチをする癖があった。鉛筆で荒々しく描き、指や手の平で描いた場所を擦りながら濃淡を調整していく。写実的というよりも、やや抽象的で、時折現実を描写するよりも心象が浮かび出て風景や人がいびつに描かれることもあった。

スケッチをたまにしていることは同じ期間工の班長にしか話していない。だが言われたのは派遣会社の上司からだった。やつが話したに違いないと思った。

「君、仕事のこともっと考えてしっかりやらないと。スケッチなんてしてたって食えないんだから。もっと効率のいい動き方とかあるでしょ。日々考えて仕事しないと使い物にならないよ」

その時怒鳴り散らしてしまったのだ。二人とも殺そうと思ったほどに激昂した。当然喧嘩になり、クビになった。

そもそもスケッチを始めたのは叔母の影響だった。小学二年の時、父親を描く宿題が出た時、鉛筆で大胆に描いた顔が、同じクラスの子達にも「お化けのようだ」と評されたため担任に親を呼ばれ両親から真面目にやれとこっぴどく叱られたが、叔母だけは「あなたの絵は平野遼のようだねえ。こんな絵を今から描けるなんて将来は有名な画家になるかもしれないねえ」と褒めてくれたのだ。

平野遼。小倉を中心に活躍していた洋画家で、まるでその絵は風呂場の曇った鏡に映った景色であり、そして人物画はジャコメッティに影響を受けただけあって、引き伸ばされたようにいびつで、地に沈むような陰の重さがあった。

スケッチをすると両親が止めようとする。こんな怖い絵を描くんじゃない、と叔母が買ってくれたスケッチブックを取り上げられたこともあった。

絵を描くことにどんな意味があるのだろうか。金にならないはずなのに、五万円もする水彩の色鉛筆百二十色セットも半年前に買った。

油絵は、怖かった。

何もかもを塗り潰してしまいそうで怖かったのだ。

何故、中瀬は怒り、そして憎悪を抱いたのか。自身にもわからぬことであった。だが、心の奥底に叔母が褒めてくれたことへの清々しいほどの感謝の気持ちがあった。絵を描いている時だけは自由になれた。

その自由を長年両親は抑え付け、そして鬱屈したものを中瀬の中に育て上げた。

一人暮らしを六年ほど続けられていたが、この調子では、また家に戻らなくてはいけない。

悲哀と怒りと憎悪で太陽が歪んでいた。もう、死んでもいい、とさえ考えていた。

息切れのように呼吸が荒々しくなってくる。心臓が破れそうなほど高鳴っている。これはなんなんだ、と自身も当惑するほどであった。飲みすぎたか、いや、そんなはずはない。いつも飲んでいる量よりは少ない。

ボトルを懐に入れようとするミニスケッチブックが指に当たった。

鉛筆は、鉛筆はあるか。ボールペンでもいい。

内ポケットにあったボールペンを見つけ、暴れるように描いた。描ききった時、母親から電話がかかってきた。

携帯電話のボタンを押し、耳を当てると「父親が倒れた。危ないから今すぐ戻ってきてくれ」とのことだった。

「くっくくくくくくくく……」

喉の奥から笑いが込み上げてくる。

そして高らかに空に笑いを飛ばした。しばらく、笑っていた。

気がつけば泣いていた。ふと気がつくと、遠方に見えていた煙突から吐き出される煙が黒く染まっている。その周り、太陽も雲も空も色を変えている。

何もかもが色を変えてぼやけて映っていた。

涙は、止まることなく流れ続けていた。

第八話「ゴッホの肖像」

珍しくパイプでタバコを吸う老人だった。

例えて言うならゴッホの自画像にほぼ近い。口や頬にまで髭があり、だいぶ白髪が混じっていて、いつもジャケットを着て海を見ている。洒落たハットに煙が絡み付いているようだった。

見た目は老人っぽいのだが、体つきが顔の皺に似合わずガッシリとしていて、来ている服がはち切れんばかりだ。

海を見ている、というよりも、どうやら船を見ている。船に興味があるのか、もしくは体つきから船乗りか水兵だったのか、と色々想像はするが、どうにも話しかけづらい。

ここからは山口県が見える。下関市だ。目と鼻の先にある。だが、彼はいつも船がない時は小倉方面の工業地帯を見ていた。

タバコに火をつける仕草は実に板についている。愛しい女性を抱くように顔を俯け、パイプを両手で抱えるようする。マッチでつけた後は数回小刻みに吸ったり吐いたりして火をくぐらせる。落ち着くとゆっくりとパイプを吸い出す。火が付くまでの最初が肝心なのだろう。パイプの様子が落ち着いてからは実に悠々と煙を吸い込んで、感傷深く煙を吐いている。

煙は老人に寄り添うようでもあり、老人がマントをまとうかのようでもある。老人の頬や髪を撫でながら空の雲となり、夕陽に溶け、やがて夜を誘っていく様子は実にポスト印象派的な様子を……いやいや、僕が気取りすぎか。

後一時間も経たないうちに日は沈む。背にしている門司区側は明るく輝き、下関側はぼんやりと明かりを灯しだす。もしもう少し背中側の門司駅方面が暗ければ「ローヌ河の上の星月夜」という絵画とそっくりになるかもしれない。さながら、小倉の工場地帯は北九州版「星月夜」か。

僕がどうして老人のことがわかったかと言うと、関門海峡を眺めるのが好きで、関門海峡を往来する船を眺めながら浮かんだ詩を書くのが、僕の仕事のようなものだった。勝手に言ってるだけなんだけど。

詩人です、なんて言うと奇異の目でしか見られない。話す人、話す人の心の裏の苦笑が顔にまで滲み出てきて話が續かなくなる。だから僕の作品はいつも孤独だ。そんな孤独感が、あの老人と重なるのだろうか。

老人の姿は他者を寄せ付けない。実に勇壮で、次に吐く煙はいつなのか凝視してしまう。まるで煙が老人の魂のように周囲の空気を優しく絡め取っている。棘も一つもなく、煙にすら魂が滲み出ている。僕は何度かこの場所で老人を見ていくうちに、すっかり好きになってしまったのだ。

夕暮れの関門海峡を船がゆっくりと滑っていく。工場側に見えたその船から霧笛が聞こえたような気がした。気がしただけで鳴っていないのかもしれない。ただ小さな船舶の吐く煙と老人のパイプから出る煙が見事に重なり夕焼けを掲げ輝かせたかと思うほど陽は目に染みた。

手の届く場所に対岸は輝く
渡るでもなく 惹かれるでもなく
老人は岩となり 燃える炉となり
煙を荒獅子のように吐き
景色を塗りつけ 叩き付け
空を返し 視線を陽へ打ち付ける
燃え盛る空は縮み上がり
月は老人に安らぎを誘おうと必死
眠らぬ間に朝を引きずり出そうと
大地を二の足で踏みしめ
パイプ煙草に火をつける
霧笛は海峡を走り
煙は船を進ませる
男の熱の名残となって
燃え盛る証として
煙る魂は燻し銀
かの大地に立つ老人は
誇りと歴史を背負い立ち
煙のうねりに巻かれていく

僕が作った詩を、かの老人に捧げる。

第九話「才能」

「しかしあの川端もついにノーベル賞か。我ら文士としても誇らしい限りじゃないか」

いつになく上機嫌の加古に肩を組まれながら澤田は縮こまっていた。川端康成だって知り合いでもないし、加古も文章が売れているわけではなく文士気取りをしながら引っ掛けた女から酒代をもらい、今のように、さも偉そうに街を闊歩するというヒモでしかない。

澤田はそんな加古と一緒に歩いて同類だと見られることが恥ずかしかった。

「ここらへんじゃ森鷗外が住んでいた家があるそうじゃないか。君も舞姫くらいは読みたまえよ」

鍛冶町には飲み屋がひしめいていた。何軒か、はしご酒をしながら加古の相手をする。それは加古が文士としての才能は劣悪であっても、文章に対する知識はあったからで、師に仕えるかのごとく澤田は共にいた。

「加古さん」

珍しく澤田から声をかける。その時はいつも質問が多かったため加古も「どうした？

当ててやろうか。今度は誰が取るかってことだろう？ 三島だろうよ。いやあ、あれは成熟してきているぞ」と得意げだ。

「違うんです」

「何が違う。君にも目星があるってことか。言ってみたまえよ」

「あの……」

澤田の言葉が詰まる。

「どうしたんだ。どうせ当たっても外れても損はしない。俺や貴様のような世に埋もれた才能は沢山あるのだ。そのキラ星の名を口にしたとて、女の名をあげるようなものだ。損はしないよ」

「僕、文章やめようと思うんです」

「なんだと!？」

加古の驚きはいつにないほどだった。結局飲み屋に引きずり込まれ事情を聞かれたが、ごく単純な理由だった。

「子供が今度、できるんです。だから小説家として金が稼げない限り、僕はやめないといけないんです」

加古が卓を大きく叩くと上にあった焼酎のコップが兎のように跳ねたかと澤田には感じられた。

「何を言ってるんだ貴様は！ 文士は例え貧乏であろうと作品こそ高潔かつ気高くあるべきなのだ。例えなんと言われようと気位を貫き通さずして何の作品と言えようか！」

女の恥部や裸体ばかりを描写した詩を数多く書いている加古の作品は高潔かつ気高いだろうか、と澤田は心の中で思った。

「僕も川端くらいはどうかかなと思っていて。あんなもの、十分に越せるんですよ」「なっ……」

澤田の言葉に加古は今までにない驚きを覚えた。一度としてこのように自信をみなぎらせた言葉を吐いただろうか。

加古は澤田の作品に嫉妬を覚えることが数多くあった。内気で作品を外に出すことさえ躊躇するような臆病者とばかり思っていた。実力ある澤田に説教や教えを与えることが加古の慰めだった。酔い痴れ鍛冶町を闊歩していた加古に比べ、いつも澤田はそこそこ冷静に、消極的に加古に付き従っていた。

「貴様に足りないのは、ただ一つ、勇気だけだと思っていた。貴様が、そんな言葉を吐けるとは思っていなかったよ」

酔いも冷めるような気持ちで、かつおごそかに告げつつもりではあったが、いつもの酔っている加古には違いなかった。

「決めたんです。もうすぐ新しい命も生まれる。僕の時間は、なくなってしまったんです」「何も今すぐここで打ち切ることはないだろう。小説は仕事をしながら、家庭を持ってでも書ける」

「ここで未練を断ち切らないと、二人の人生を駄目にしてしまうんです！」

両手で机を叩き付け、椅子から立ち上がった澤田を口を開けながら加古は見上げていたが澤田の瞳に涙が浮かんでいたのを見逃しはしなかった。それ以上何も言えず、澤田も一緒にいることが辛くなり店を逃げるようにして出ていった。その後澤田は一度として加古に会った事はなく、加古も澤田を訪ねることはなかった。

加古はどうなっただろう。思いをめぐらせていた。

「おじいちゃん。おじいちゃん！」

袖を引っ張られ澤田は我に変える。我に返ったが、一瞬何処に出て行く階段なのかわからなくなるほど昔を思い出していた。目の前には茶色い石段風に作られた階段がある。外に続く階段だ。出口の先は、よく晴れているようだ。

「どうしたの？」

心配した孫が見上げている。まるで違うようなものを見る目で、不安の色を浮かべながら、あの日の加古のように。

「いや、ちょっと昔のことを」

「昔のこと？　どんなこと？」

孫の言葉に「いやあ、忘れちゃったよ」と言葉を濁した。しかし澤田の中には、くっきりと思い出された。

オーガイストリートと名付けられた道を昔歩き、密かに闘志をみなぎらせながら劉寒吉、火野葦平を越す北九州市の小説家になるのだと意気込み、三島由紀夫の死、続く川端康成の自殺でやめて良かったのだと心に刻み込んでいた、あの日々のことを。

今は孫も出来た。これでよかったのだ、と改めて孫を見ながら感じた。悔いはない。

その後澤田も苦しむことなく老衰で死んだ。死後には膨大な小説の作品群が見つかったが、ボロであったのと、小説にはまったく知識もなく本も読まない娘夫婦には、ただ

のゴミとしてしか見えなかったため遺品整理の際、次々と作品はポリ袋に包まれてゴミに出された。

その作品が優れていたかどうか知る者は、もう誰一人としていなかった。

第十話「野焼き」

全国ではまだ何十箇所か、野焼きが行われている。

野焼きというのは、その名の通り、春先及び夏になる前に枯れ草に火を放ち野を焼き、害虫や山野の植物の育成を人工的に制御する方法であり、平尾台でも二月あたりに毎年行っている。

火がついた時は火が生き物のように計算されつくして野を焼いていく。その姿を見に毎年人が訪れる。

野焼きの準備が始まる様子を見ながら、今年に限って海藤太は我が身に重ね合わせるように苦々しく見ていた。野焼きが行われる場所は当然巨木がない。

善と悪の構図はとても楽しいものだ。自らが善であり、相手の悪辣な点を挙げれば挙げるほど、自らの善への正当性が高まれば高まるほど、人は人を断罪したくなるものだ。

そのような性質を太は小学校の頃から体験していた。所謂いじめだ。

クラス中が敵に回ったこともあったし、担任までが生徒の親に丸め込まれて敵側にまわったこともあった。思春期の環境としては凄絶であったが、太は相対する相関図で人を見ることを中学校二年生で止めた。太自身にとって何が一番いけなかったのか。協調性がなかったのかかもしれない、と理解したのだ。協調性とは周囲に溶け込む力だ。蔑まれてもいけない。高みに行ってもいけない。ただ周囲との調和を保つために、目立ちもせずいじめられるほど陰を薄くもせず、均衡を保つことを意識する。すると人間関係は上手くいった。

ただ、高校の時は荒れた。我慢していたものが爆発したかのように人を見下した。自分以外は全員馬鹿だと思えた。実際中学校のレベルが高かっただけに、相対評価で中学校の成績は悪くとも高校では成績に華が咲いた。中学校から同じ高校へ行った連中はたちまち学年トップに躍り出るくらいだったから、当然周囲の連中は猿のように思えた。勉強しない方が悪い。だから成績が落ちるのだと散々中学校で体験しただけに、馬鹿は馬鹿だから悪いのだという考えが太を支配していた。むしろ見下す快感で自分が偉くなったようにも感じた。面白いほど気分が高揚した。

母親にも「あんたはあの頃おかしかったよ」と後で言われたくらいだったから、相当鬱屈したものを抱えていたのだろう。当然、孤独でいることが多く、またその孤独感を人を見下すことで発散させているところがあった。

大学に入ってから落ち着いたが社会人になってから、また変わった。周囲の人間たちが普通ではなく洗脳されたように会社中心主義、上に尽くしてなんぼという異様な雰囲気だった。この異様な雰囲気に以前の太ならば飲み込まれていたが、今までの経験から処世術は見事に身につけており、自分の醜さも含め、人間いかに行動するかの原理

のようなものが見えてきていた。すると上司に取り入れることも容易になり、あれよあれよという間に同期を抜いて出世コースに乗りかけたのだったが、その時に一気にあることないこと、むしろないこと尽くしのうわさが恐竜ほどの尾びれをつけて出回りだした。

野焼きは計算されつくした火が回っていく。むしろ自分を貶めている何者かは昔で言う流言飛語の計が見事に決まり、悪である自分を引き摺り下ろすという構図に快感を得てやっているのだと、太は考えを巡らせた。

腸の煮えくり返る思いではあったが、まずは野の前で深呼吸をした。枯れ草のいい匂いがする。それは生命の香りにも思えた。少しだけ心の中に風が吹き落ち着いた。

野焼きの行われる日、太はわざわざ有給を消化して見に行った。その煙の味を喉の奥で噛み締めなければ、まるで夏が来ないようにも感じるものだが、綺麗に計算された区画を焼き、人間が思った通りの状態に戻していく野焼きの技術を、お見事と思うと同時に、今起こっている現実と照らし合わせ、考えを巡らせていた。

燃え上がる炎を見ながら、いつも人の心を考え、自らの人生を振り返っていた。炎は人の心の埃を燃やす作用があるのかもしれない。

太には勝算があった。会社では何も自分の利益だけを掴もうとしているわけではない。上司の悪辣な利己的権力行使と利益享受に腹が立ち、下に立つものをないがしろにする構図を正したいだけだった。それは太が経験してきた思春期の理不尽さから来る反動としての正義感だった。

だが残念ながら太の同期たちや、会社の雰囲気から「出しゃばれば地獄に落とされる」と思っていたし、面倒な人間は排除した方がよいと考えていた。

太が正義を行使しようとするほど、周囲は太を貶めようと画策するという皮肉は、太にも想像の及ばぬことではあった。

第十一話 「にやるようににやる」

キジトラ柄の猫が二匹勝山公園敷地内の八坂神社にいる。

一匹は薄くもう一匹は濃い色をしているが、濃い方が兄貴だ。往来する人間たちを気にも留めず歩きながら話をしている。

「兄貴」

「にゃんでい」

「最近よく見かけるやつがいるでしょ？」

「最近？ ああ、白に黒のぶちのことかい」

「そうそう」

「そいつがどうしたってんにゃ」

「そいつ、また新しい女はべにやせてましたぜ」

「ほう。どんな女だい」

「それが茶トラの……」

「茶トラ！？ にゃんとしたこと。そいつは俺の知ってる、あの茶トラの女かい」

「え？ ええまあ、たぶん。ここらへんで茶トラの女ったらあいつくらいにやものですから……」

キリッと兄貴は晴天を見据える。弟は足取りの止まった兄貴を見据える。

「ど、どうしたんで？」

気持ちを落ち着かせるために右前足を舐めて頭を掻く。

(落ち着け。落ち着くんだ。最近どうも冷てえと思ったら、新しい男ができたのかい。あいつ俺だけだって言ってたのに。そんなことなら人間からもらったサバ焼き、あいつにやるんじゃないかった)

弟は突然毛づくろいを念入りに始めた兄貴の様子をじっと眺めていた。

(兄貴は考え事する時や、焦りを隠す時は必ずけづくろいをするんだ)

長い付き合いだから全てお見通しだった。

「あら、この猫かわいい。仲良しなのかな？ 柄も似ているし、兄弟なのかもね」

「東京ケーキあげてみようか」

「いいねいいね」

人間の女二人組みがいて二匹を見下ろしていた。兄貴は興味も持たず、動揺した気持ちがまだ収まらず毛づくろいをしている。弟はじっと女たちの瞳を見つめて媚を売ろうと営業体勢に入っている。足元に擦りより、時折瞳をじっと見る。これで人間の女はイチコロだとわかっている。

「キャー。かわいいー！」

手の平に置かれた東京ケーキをバクリと食べる。兄貴の様子を逐一チェックしながら一気に平らげ、差し出された二個目にかかった時、兄貴が気がついた。

無言のまま止まっている。何故お前は餌にありつけているのだと思っているのだろう。

「お腹すいてたのかな。凄い勢いで食べてるよ」

「ねえ、こっちの猫にもあげようよ」

「そうだね」

もう一人の女がしゃがんで東京ケーキを差し出すと弟は啜えてさっと走り去った。

「にゃ、にゃにい！」

兄貴が気がついた時にはもう追いつけない距離にいた。食い意地の張ったやろうだ。

走り去りながら弟は思う。花より団子だ。女がいなくても生きていけるが飯がなくては生きていけない。

と、言っても遠くには行かない。必ず境内の敷地を中心にして生活をしている。

結局兄貴もたらふく食べた。

「あー、おなかいっぱいだにゃー」

二匹とも社の賽銭箱の近くで寝そべっている。昼寝にはいい天気だ。弟は食後の毛づくろい。兄貴は石畳の上で眠った。

その兄貴が気にかけていた肝心の女は何をしていたかという、ぶち猫と会ったばかりだった。

「ねえ、おいしい食べ物一つも持って来れないなんて、つまんない。おいしい食べ物欲しいなあ」

甘い声でおねだりする。さすがのプレイボーイも断れず、静々と食べ物を探しに行く。

ここの猫はのんびりしている。だが、皆生きるために何をすればいいのか心得ているのだ。

第十二話「戸畑城陥落！」

「殿！ もはや城は敵に囲まれ逃げ場もありません！」

腹心の小太郎が城主の堅剛へ悲痛な面持ちで叫んだ。

「ぬう。敵め、我が軍を出し抜き、ここまで追い詰めるとは、天晴れなやつめ」

敵軍二千。堅剛の軍勢は三百にも満たなかった。敵軍は騎兵を主戦力としていたため、山や山林に逃げ込み馬の威力を消しながらも戦ってきたが、背後に伏兵を置かれ次々と拮抗していた兵数は削がれていった。

問者の報告によれば森の背後には怪しい報告はなかった。それも一日ほどで伏兵が存在することになったのは、恐らく馬の機動性を生かした奇をてらった作戦であった。それも森の中で打たれたのだから予想だにできなかったというわけだった。

「黒崎城の応援はまだか！」

「裏切った長瀬玄幽斎の軍勢に足止めされている模様！」

苦虫を噛み砕いたような顔をし、怒りの表情を浮かべる堅剛。もはや大将たる憚然とした姿は崩れ、憎しみに身を乗っ取られんほどであった。

「もはや打つ手はないのか……」

どう考えても絶望的な結末しか浮かんでこない。背後は手薄だが急流だ。助かる見込みは薄い。

「殿……」

「どうした」

「恐れながら、殿の首を差し出せば部下の命は助けてやるとの敵の大将の矢文が届いております」

「何！？ わしの首を望んでおると」

「はっ！ 殿一人のお命で皆が助かるなら」

「貴様！ それでも我が家臣か！ 長年録を食みながら、このような言動。その首飛ぶことも覚悟しておるのであろうな！」

「しかしもはや勝負は決しております。ご決断の時かと存じます」

このまま小さな城の主として終わってしまうのか。だが我が望みは天下布武。七徳の武を持って、天下泰平の世を築くまでは死ねぬ。だがこの窮地をどう脱すればよいのか。

敵の軍勢の声は場外に鳴り響いている。その轟く音だけで城内が揺れているようであった。

例え忠なき臣下を持とうと一人だけ逃げるは卑怯。信を失い義に欠く。かと言って、安易に腹を切るのも勇なきこと。謀をなすには、いかにすべきか。

「お主、このわしと共に死ぬ覚悟があるか」

「嫌でございます！」

よくも言ったものだ。何故このような輩を今まで傍に置いていたのか。寝首を搔いて相手に投降する勇気もなかったのだろう。その臆病さを慮るとかわいいやつにも思えてくる。

さて、生き延びるにはどうすればよいのか。負け戦の末の籠城。策があるなら既に出している。背面は急流。周囲は森。正面には細い道が続いていて道らしい道と言えば、それぐらいだ。

待てよ。森。森か。

「城内の声の大きいものをなるべく集めよ！」

「は？」

「大きな声が出せるものじゃ！ 早くせんか！」

「は、はい！」

集められたのは三十二名。これほど元気があるものがいたとは。

まずは兵たちに飯をたらふく食わせてから話をした。

「よし、お前たち。今宵城の背面より、この城を脱出せよ。五名は火の焚けるものを持ち敵軍の右側面へ、残りの二十七名は左側面に隠れ、火の手が上がったら二十七名はありったけの声で森を駆け抜け、大声をあげまくるのじゃ！」

「しかしそんなことで敵が動じましようか」

「どうせお主たちも投降したところで冷遇されるだけじゃ。一か八かの決死行の方が武士として様になろう」

その日の夕方、敵方の陣から炊事と見られる煙が上がったのを見逃さなかった。敵はもう一押しで落ちると油断したのだろう。また季節が雨季間近で植物が水をあまり含んでいなかったことも幸いした。

夜には警戒が薄れ、子の刻に城から兵が出て丑の刻に差し掛かった頃、火の手が上がりにだし、時の声が響きだした。勝ち驕っていた敵軍は浮き足立ち、援軍か伏兵かわからぬ状態に備えようと陣形が崩れたところを一気に打って出て、地理をよく知っていた森へと逃げ追撃の手から逃れ、半数以上が生き残ることとなった。

戸畑城は陥落したが、小太郎を含め、堅剛は生き延びることとなったのだ。天下布武への道のりは長いが決して堅剛は諦めることはない。

「ぷっ……くふふふっ」

堅剛は散歩途中韃ヶ谷で見つけた誰が造ったか知らない、腰の高さほどもないミニチュアのような城を見ながら妄想をして、笑いを押し殺していた。

「俺って、結構戦国の世でも生きられるかもな」

ただの戦国マニアの堅剛が、現代社会において自らの理想を貫けるかどうかは、どうにも怪しいところがある。

第十三話「待ち合わせ」

一分一秒刻んでいくごとに、光が集まって眩しくなっていく。

頭上にかかる若戸大橋を走る車の光も対岸の戸畑地区の光も輝いて美しく見えてくる。

私の胸は大きく高鳴り、あの人を待ち焦がれる。ちりちりと燃える胸の内は溢れそうな想いで一杯になってくる。

「ごめん。約束の時間には遅刻しそうなんだ。急な仕事が入って。一時間以上は遅刻しないようにする。本当にごめん」

彼からのメールを読んでも、がっかりはしない。よく時間を過ごすごとにカップルはマンネリ化するなんて言うけれど、私はどんどん彼のことが好きになっていくし、今時珍しく大胆でお馬鹿で繊細で。冗談も沢山言ってくれて笑いが絶えない。今はお互いに結婚を意識して付き合っている。

今は夜の七時。若松の渡場で待ち合わせしようと約束して街の灯をうっすらとゆらめかせる洞海湾を眺めている。穏やかであたたかな日。そろそろ夏の気配を感じるほど、昼は暑く感じるようになったし、夜も上着を羽織る必要がまったくなくなった。

明日からは気温も三十度を超えてくる日が出てくる。もうすぐ六月にもなる。

彼、いつ来るのかな。待つことは嫌いじゃない。彼と共に過ごした時間を思い返せば、胸が安らいでいくようで楽しくもなってくる。辛いことも、一緒だと辛く感じないところが不思議。なんとかなりそうな気持ちになってくる。

電話がかかってくる。表示は彼。飛びつくように携帯電話を取ると、洞海湾を眺めていて欲しいという。

？

どういうことだろう。

五分ほどすると向こう岸から船がやってくる。定期連絡船だろうか。暗くてよくわからないけれど、それっぽい。

突然船がクリスマスツリーのように輝きだす。船全体が電飾で飾られていて、様々な色の光で船のふちや柵が飾られている。

なんだろう、あの船。あのことを電話で言ったのかな。

やがて近づいてくると先頭の甲板に誰かが立っているらしいことがわかる。暗いからお客さんの可能性もあったけれど、パッとスポットライトが両サイドから光り、彼が照らされた。

白いタキシードに薔薇の花束。ベタベタの格好。驚くよりも笑いを堪えるのが精一杯だった。周りに誰かいるとか、そういうのはどうでもよかった。

彼のありったけの声。船は遠くても聞こえてくる。全身で、出せる全ての息と力で叫びあげる。

「美香さーん！　結婚してくださいー！　愛していまーす！」

堪えきれずに笑ってしまう。馬鹿だ。本当に馬鹿。普通ならドン引きするレベルだよ。予定ではこれから食事に行くというのに、そのタキシードにはドレスがぴったりだけど、今日の私はちょっとお洒落なワンピース止まりだよ。

大声で笑いながら私は頭上に大きな丸を作ってみた。甲板で薔薇の花束を持ちながら飛び跳ねている彼の姿が見える。

船が橋場に着くと、彼が私の名前を連呼しながら口付けをしてくる。もう、笑って涙が出てるんだか、嬉しくて涙が出てるんだかわからない私。口付けされるごとに涙が出てくる。

「ねえ、もしかして、あれのセッティングで時間かかって遅刻したの？」

「え？　ああ、うん。ほら、スタッフが友達一人っていう状態だから、意外に時間かかってさ」

船の方を見ると、まだ点いている甲板のスポットライトに照らされた男の人が右拳をぐっと顔の横で握っている。

いくらかかったか、なんて聞かないでおこう。きっと無理したんだろうなってことぐらいはわかるけど、彼だって博打に出たんだ。嫌われるかもしれない過剰な演出をあえて体当たりでしたんだから。

「ぶっ……あはははははははは」

彼に抱きしめられたまま大声で笑い……泣いてしまった。それも笑いながら涙が止まらなくなった。心配した彼の言葉を遮って、私は叫んだ。

「私、この馬鹿と結婚しまーす！」

次々と零れていく涙は洞海湾を飾っていく。彼の涙と一緒に。

第十四話「善と悪」

どうすればいいのか腹は決まっているはずが、岩淵幸弘の心の中では迷いがあった。いかにも矛盾している。

夜明けだ。若戸大橋の向こうに見える戸畑区の工場地帯には絶えることなく煙突から煙が吐き出されている。変わらぬ景色、変わらぬ営み。

岩淵は深夜から高塔山公園から北九州市の景色を眺めていた。落ち着かず溜息ばかりをついて、眉間に皺を寄せ、自分の体が泥に埋まっていくような感触さえ覚えていた。知らなければよかったのかもしれない。

自分の年齢を考えると余計に気分が重くなる。今年で五十二歳。万年課長でもいいとさえ思っていた。一人娘が大学に入ったばかりで金がかかる。今から貯金を崩すには老後が暗い。

しかし岩淵がこれからやろうとすることは、会社と職を失うことで、自らの未来を潰す事であり、この地域では生きていけないことを意味していた。

気がついたのは、一年ほど前だった。出世していった同僚の一人が突然首を切られた。自主退職を促されるわけでもなく、本当に突然だった。彼は営業部長で、不景気のあおりとはいえ、業績不振の責任を負わされた形となり責任を取らされたはずだった。しかし次の部長に代わった途端会社は黒字になった。

おかしい、と感じた。

誰もが新しい部長の手腕を褒めていたが、岩淵から見れば腕がない。センスがない。話術のレベルが低い。とても人に好かれるような魅力的な男には見えなかったし、どこか人を小馬鹿にしたような物言いが多かった。それは自分の業績を鼻にかけているのか、本当に仕事ができるからなのかかわからないところがあったが、ハッキリと確信したのは、商品を構成している小さな小さな部品の一つなのだが、その部品の重要性を理解していなかったことだった。特許技術のついた部品は、うちの商品にしかない。

岩淵は調べた。何故、黒字になったのか。同僚でさえ黒字にできなかったものが、人が代わったぐらいでできるものだろうか。

事が事だけに、誰にも話さず一人で黙々と調べた。岩淵は仕事ができないと思われていて、完全な壁際族として会社のあらゆる人間から嘲笑の対象として存在していた。残業する理由も容易に作れた。深夜まで残り、家に帰っても妻と娘から文句を言われる始末。何の利益があろうか、と思うことすらあった。

ダミー会社の存在に気がついたのは調べてから半年後だった。商品が売れたように見せかけるシステムが出来上がっていたが、所詮は子供騙し。いずれはばれる。この会社は終わっていた。末席とはいえ北九州を代表するような会社だ。こんなことが世間には

れば経営破綻は免れない。うまくどこかに買収されたとしても人員削減は必至だろう。一体、会社の人間のどこまでがグルなのか。この事実を公表したからと言って、誰に褒められようか。妻は仕事を失ったことに対して激怒するだろう。そして地域に居辛くなる事も地元大学に通いだした娘に大きく影響してくるかもしれない。

それよりもまず、娘は学費が滞るかもしれないことを知ったらどうするだろうか。

深呼吸をする。体が震えてきていた。何もかもが怖い、と唾を飲み込む。

若戸大橋を走る車のヘッドライトやテールランプが、先ほどはあれだけ眩しかったのが夜明けの日に薄れてきている。

この日のばかりは太陽が昇っていくことが無慈悲にも感じた。

高塔山の中腹には慰霊碑がある。若松港の防波堤として沈められた「柳」「冬月」「涼月」の三隻のものだ。

いずれの三隻も前線に出て撃沈されることなく戻って来た駆逐艦だ。

満身創痍になって、たとえ虫の息となろうとも、果たすべき役目がある。

手には告発内容をつぶさに書いた手紙と書類のコピーが入った封書が握られている。

五十二歳にして、今まで積み上げてきた人生を自らの手で崩す。このまま黙っていても傷が深まるばかりだ。黙って退職すればいいのか。いや、俺にはできない、と肝を座らせた。

岩淵は朝もやを一気に鼻から吸い込むと、太陽が完全に地を照らし出したのを目に焼き付けた。

善を行い、悪人となる。

岩淵は昇る太陽に背を向け、駐車場へと歩き出した。

第十五話 「檸檬」のある景色

僕はその人の考えていることが、よくわかるような気がする。

気がするだけで充分かもしれない。どうにも口が悪く、意地も悪く、意固地で、信念があり、物事もハッキリ言ってしまうタイプだから敵も多いことだろうと思っている。アイディアマンであり、実行力もあり、我が強いくせに実は傷つきやすいナイーブな面を持っているが、ブルドーザーのような力強さと突進力で、そのような繊細な一面は一切感じ取ることは出来ない。

考えていることがよくわかる気がするのは自分もまた、どこかひねくれまくっていて、真っ直ぐなようで何回転もしたねじりの後のような真っ直ぐさだから、真面目に偏屈である人間と気が合うのだろう。文章的には変だけど、これぐらい妙な言い回しの方がピッタリ合っている。

僕はその人とは偶然出会った。知り合いが絡んでいた人でネット伝いで出会い、まだ一度も現実で出会ったことがない。でも長い年月の中で何をしているのかはSNSで見ている、色々とこちらから悪態もつきまくっている相手だが、その人にしては珍しく怒らないタイプの相手が自分なのだろうと自負している。

よく、夢を見る人だと思う。老いてもなお盛んだし、発想が柔らかく面白い。だけど時折見せる素直さが他人へ意地悪さとなって伝わり、まるで孤軍奮闘しているように見えてくる。

その人の夢とは何だろう。

一枚の写真と、今までのその人の記事と。

本屋に行って「八幡では文学は若い者ならば、誰もが熱く語っていた」と店員に語られながら、文学雑誌が主人との馴れ初めだという話を聞いていたその人は、写真サイトを作り、それを北九州を代表する写真サイトまで育て上げたところ、その人の見ているものが透けて見えてくる。

また、文学の街にしたいのだ。写真というツールを使って、北九州の魅力を全国にアピールし、写真を撮るという視点、その写真を撮ることそのものや、それによって見えてくる違った視点を地元の共有財産にしたいのだ。

だが、どうにもこうにも、その人がその輝かしい財産を皆で作らしたらどれほど素晴らしいことか、なんて言っている姿が見えない。当然私利私欲のために動き出したんじゃないか、と言い出す人も出てくるのは当然のことのようにも思える。

……溜息が出るほど、対人に関しては不器用な人なのだろう。

いつか、雑談をしている時に「桜の木の下に死体があって言い出したの誰だっけ」という話になり「梶井基次郎ですよ」と答えると、なんだか嬉しがっていたようだ。嬉し

がる理由が僕にはわからなかったけれど、そういう話ができること自体が嬉しいのだろうと思った。

そしてその人がお洒落な本屋に迷い込み、古民家を改装した立派な本屋だと気がつき、店員のおばあさんがその人の地元の人で話が盛り上がり、ご主人との馴れ初めまで聞いた本屋の名前は「檸檬」だった。

その「檸檬」とは、梶井基次郎の短編小説で「えたいの知れない不吉な魂が私の心を終始おさえ付けていた」という出だしで始まるものだった。

最後は何をやるかと言うと、お堅いイメージの丸善に入っていて本の色彩をゴチャゴチャに積み上げ最後頂上に檸檬を乗せて帰るのだ。

変に気が重くなりそうな暗い色合いの分厚い本の上に檸檬という色鮮やかな光を乗せて今までそうであることが当然だったものへ破壊を行う。それは行き詰った芸術性への視点や感性の革命とも言える行為だ。

何年かぶりに「檸檬」を読み終えると、その人の企みもまた、ここにあるのではないかと思えてくる。

札幌では、遅咲きの桜が散った。

アスファルトの上を桃色の花びらが、あたたかな風を受けて走っていく姿は、夏を目の前にした者への、静かな便りのようにも思える。

北九州は今、どのような景色なのだろう。もうこちらで言う夏なのだろうか。

写真を一枚一枚めぐりながら、撮影者が見た景色と、思ったことを日々考える。悩んだり、調べたりしながら、文章を綴る。

一度も住んだことも行ったことがなくても、そこへ寄り添い歩いたかのように街を見て行く。それこそ、その人の目論見なのだろうと知る。

大事にしたいものは沢山ある。でもそれは、言葉にできないほど沢山あるからこそ、口下手になっていくのかもしれないと感じる。

そんな思いがあり、「檸檬」を置きたくなる二人だからこそ、その先に黄金の光を見ているのだということを僕はよく知っている。

第十六話「夫婦喧嘩と一人酒」

恋をしたら必要になるのは観察力で、愛を抱いたら必要になるのは忍耐力だ。だが、この二つは、その真っ只中にある内は自然としている。苦痛になった時点で完全に失っているのさ。恋も、愛も」

そう言った俺の作家志望の友人がいた。

「俺はクズだし、お前は立派に生きているから、自信持って生きていけばいいんだよ」と酔った時口走ることが多かった。

小説を書いてはいたが鳴かず飛ばずで、俺は彼の小説が好きだったが、どうにも小難しいテーマを扱っていて、ずっと頭に入ってこないことがある。今時純文学なんぞ流行るのかね、とも疑問を思いながら彼に時折小説の駄賃代わりに驕ったりもしていた。

友人と飲む時は、いつも俺の家から近い黒崎駅前にある「エビス昼夜食堂」に来ていた。店内は狭いが品揃えが家庭的で値段も安い。大瓶の銘柄も揃っていて、どれも同じ値段だというから、最初は少し高めのエビスで乾杯して、食べるものによってラガーやスーパードライに変えたりする。

友人が珍しく小倉地酒無法松を頼んだ。日本酒は酔いすぎるからと言っていたのに初めて俺の前で飲んだ。

「まあ、お前も飲めよ」と注ぎ、まず一杯ぐいと飲み干すものだから俺も倣って同じく飲んだ。そしてそれから二人でちびちびと無言のまま飲んでいたが急に「俺さ、よく書くの止めよう止めようって思うんだけどさ、俺止めたら、自分が自分じゃなくなっちゃうんだよ。結婚もしたことないけど古女房と別れるような感覚なのかな」と珍しく弱音を吐いた。その日、友人を必至に慰めたし、その慰めの言葉も俺の中では偽りはなかったが、惨めさを感じたのかもしれない。その日以来、消息がまったくわからなくなってしまった。

友人と最後に飲んでから、ちょうど一年経った日、妻と大きな喧嘩をした。小さなものはちよくちよくあったが、今回は俺の方も仕事で忙しく神経が逆立っており、妻も職場で差し迫った事情を抱えていて精神的に参っていた。

五歳年下の妻は俺にもっとしっかりして欲しいと思っているらしい。結婚三年目。内科医をやっている妻の収入よりはるか下の俺は見ていて不安なところが多いと言う。なら何故結婚したのかという疑問があるが、それ以外は好きなのだという。

喧嘩をする時はえげつなく、日頃の鬱憤を全てぶちまけてきて、その後俺の欠点をあげつらう。例えば時間の使い方から日々の行動、挨拶から話の聞き方、俺が面倒になった時のだらけた対応、などなど一通り言い尽くし、こうしたらもっとよくなるのにやらない、と小一時間ほど、子供のように説教を受ける。正論だから反論のしようもなく俺はただ黙って聞く。

会社でも妻と似たようなことを、よく言われた。「だからお前は駄目なんだ」と。どこかちゃんとしていない甘さが見え隠れするのだろう。無理に変えようとしたが、精神の健康を損なったことがあり怖くなって無理に性格を変えようとするのは止めた。行動は気をつけているつもりだが、努力の片鱗が行為に現れてこない。まるで友人の作品のようだ。

気がつけば「エビス昼夜食堂」に来ていた。無法松を頼みながら、ぶり大根、野菜炒め、玉子焼き、アサリの味噌汁を頼む。どれも家庭の味だった。素朴で、毎日食べても飽きない味。土曜の夜に妻と喧嘩をして家を飛び出してきてしまったが、この店は二十四時間やっていて、しかも半世紀以上経っている老舗だ。店内ではお母さんたちが忙しく手際よく動いている。

時間を見ると十二時を回っていた。携帯電話にメールが何通か届いていたが、もう話し合いたい気分ではなかった。あの欠点をあげつらう妻の雄弁さときたら、普段よりも口が回っていたのだから、とても恐ろしさを感じた。普段からそう思っているのではないか。俺の至らぬ点をただ我慢しているだけなんじゃないか。

酒と料理がテーブルに届くとぶり大根やら、アサリの味噌汁やらを口に運ぶ。どこか懐かしいような、ホッとするような気分になり、自分がどうにも情けなくなり、熱燗を飲みながら涙が出てきた。玉子焼きを口で噛み締めている時には涙の塩味だけで玉子焼きが食えた。

家庭を持ったはずなのに、家庭的なものに憧れているのだろうか。一緒にやっていけるのだろうか。一人になりたい。こんな調子で子供なんて育てられるのだろうか。きっと妻の言葉にグサグサ来るのは彼女が俺のことをよく見ているから、よく理解しているからこその得ているんだろうな。

ふと友人の言葉を思い出す。妻は時折愛しているを俺に繰り返すことがある。妻はきっと俺のことを本当に愛しているのだろうし、いまだ恋をしているのかもしれない。でもなんで、俺なんかと一緒にになったんだ。

別れたところで何か残るだろうか。それよりも、夫婦って恋とか愛とかの次元なんだろうか。結婚三年目にして、俺自身がどこかギクシャクしだしている。妻のせいじゃない。変わらない俺がいけない。

努力してきたさ。でも君みたいに俺は人間的性能がよくないんだ。

杯は重なり二時を回る。きっと妻はもう寝ただろう。帰りづらくなってきた。年上なのに情けない。

ふと無視していたメールを見る。

「お酒飲み過ぎないように、気をつけて帰ってきてください」

お見通しってわけか。

よし、今度スペースワールドにでも一緒に行こう。もう一度話し合っただけ俺の気持ちも伝えて、誘おう。

そういえば、と思い出した。俺がロングヘアが好きだと言ってから一度も髪を切っていない妻のことを。

それにすら気がつかなかった俺は愚かだ。家に、帰ろう。俺の家は妻がいるところなのだから。

第十七話「2736KitaQCity」

八幡西区の空には数多くのホバーカーが走っている。目の前には雑然とした街並み。工場の煙突は煙をボンボン吐き出している。ほとんどが錆びた鉄のような臭いとオイルの臭いと豚骨だ。瓦礫の山に、時折屋台。薄汚れたジャンク屋に雑貨屋。だけど時がどれだけ経ってもヌードルは消えなかった。もう体のほとんどを機械化して、あと脳が減びるだけっていう状態のハイハイハイハイ……数えるのも面倒臭い俺のじいさんが、これは昔からある食べ物だって言った。他のじいさん達は死んだのに、このじいさんだけ脳だけ人間のまま生きてる。こうなっちゃうと、もう思考が停止すると死ぬってことになる。

法律上では、もう完全な生物として人類を定義しなくて、ニューロンがどうのこのとか言って、電気信号だけで人権を認めたらコンピューターとなんら区別できなくなるから、最後の砦みたいな定義を残してる。誰もが体を機械化できて、本来の生物の能力をとくに超えられるようにはなったけど、貧乏人はとにかくヤバイ。メンテナンス費用が出せなくて仕事用に機械化して、特化された仕事についたりするけど、用がなくなったら容赦なく首を切られる。壊れたりなんかしても労災を出さないところがあるから、もうそうなるって人生終わる。

戸畑の方に行けばもっと酷い状態になる。超高層ビルの下に広がるスラム街では壊れかけのブリキロボのようなやつらが沢山いるし、最先端のピカピカのいかにも金持ちの悪趣味で作ったような高性能ロボもいるけれど、そんなものはたった一部で、ほとんどが俺らのように明日どうなるかわからないようなやつばかりだ。

とにかく、メカは賢くなった。人間の仕事をほとんどこなせるようになったし、アイディアも出せるようになってくると、人手は当然必要なくなり、そいつらはサービスしてくれるのはいいが、肝心の俺らが仕事で稼げなくなるからサービスへの金が払えないって状況で、貧富の差ってところじゃなくなっていた。

命の価値があるのは、莫大な金を稼ぐ一部の連中だけで、社会保障なるものは全てが破綻しきっていて、一部の金持ちだけにもたらされる特権のようなものに成り下がっていた。保障費用を払えるやつだけが受けられるのだから、当たり前の話だった。

それじゃあ国家とか、国民とか、命の価値とか、そういうのって何だって話になるんだけど、変な話俺らのほとんどってセックスってのを知らない。脳に直接快樂信号を送れるようになってしまったら、エクスタシーなんて得られまくりだし、生身の人間だったとしても理想通りのセクシャロイドがいるから、手練手管のテクニクを駆使されたら生身の人間なんてまず相手にしなくなる。そうしたら女は子供を産まない。男は女を相手にしない。すべて管理された施設で育てられ生まれる。精子や卵子は、そりゃ俺らのものだけ提供するだけ。

なんでこういう話をするかって、機械化によって脳を騙せるようになった。そうなる
とさっきの話。国家とか国民とか命とか、もう感覚として完全にいかれちゃうし、あら
ゆる学者はサービス三昧をされ、脳が錯覚を起こしたまま全ての事は論じられ、政治家
は民主主義の形態を取りながらも、ビッグデータからA Iが弾き出した最適な解を選び
取ればいいだけの話になる。国家運営とは思想の話ではなく「可能性としてよりよいも
の」になった。これが民主主義の行き着く先だとは誰も思わなかったが、結局多数決
による「最大多数の最大幸福」ってことはA Iに任せたほうがいいってことになってし
まったらしい。

そういうクソみたいな状態になったとしても命は生まれるし、生活していかなきゃい
けないし、狭い路地ではドローンは使えないから俺らのようなやつらが必要で、ロボに
仕事は取られたと言っても新たな問題から仕事は尽きることはない。

後、イカレタロボの破壊。これも大事。警察も対処するが、賞金が出ることもある。つ
まりメカが出れば出るほど膨大なバグ退治に追われることになるわけ。そのバグ退治が
プログラムでは、どうにも出来なくなった時、物理的な対処をしなければ街の治安は維
持できない。

昔から、拳銃やら手榴弾やらロケットランチャーやらがあった地域だと聞いている。
もちろん完全な登録制になったけど賞金稼ぎには武器が支給される。ドンパチはメカ相
手にする。

俺も武器認証のために右手を機械化することになったけど、それもまたしょうがない。
薄汚れた空を綺麗な朝日が飾りだしている。

愛用の特殊改造された電磁パルスマグナムを持って今日が終わる前にスクラップにし
なければいけないやつら一体ある。

そいつを仕留めて、飯にありつこう。

さて、行くか。

第十八話「夜間飛行」

若松区の岩屋漁港近辺から海を眺めると漁火が見える。その上空を光りが直線を描いて消えていくが、ほとんどが福岡空港に着陸しようとする飛行機で、それは時計の針のようだった。

時計は回る。星も回る。私は海岸に立ちながら波の音を聞いている。

やがて星は円を描く前に朝日に掻き消される。

だが、朝まではまだ長い。

漁火があるということは、イカでも捕っているのだろうか。五月はコウイカやヤリイカが捕れる。波は穏やかで全てが消え入ってしまうほど控えめな波打ち際にも思えた。

海はまだ冷たい。靴が濡れ、スキニージーンズに海水が上って来るようだった。

ショーツまで浸った時、ようやく体が私の体が震えた。ようやく、ようやく。

恐れに過剰になっていた思春期。私は私を消し続け、私が誰になったのかもわからなかった。大学生になった頃には無感動になっていて、何にも冷たい反応しか出来なくて、どんな痛みにも心が麻痺しているように動かなかった。

男と付き合っても長く続かなかった。だから新しい刺激が欲しくて男を一ヶ月ごとに変えたこともあった。酷い生活の中、散々泥の中をものがくように歩んで、結局自分を取り戻したくなった時、手練り寄せる糸がぷつぷつと切れていた。

私はどこに。

探し回って見つからなくて、水に浮かんだ空き缶のように流され、錆び付き、結局はここへ。

「あんたもそろそろ結婚考えないといけないね」

年頃になると結婚しなければいけない。そういう母親だった。いい相手がいないようだったらお見合いも考える。古い時代の考えが染み付いている人だった。

怖い。

自分を大事にできない人が他人を大事になんてできない。

子供。

「産んだらね、また変わるもんだよ」

友達の言葉。

考えられない。想像もつかない。私は私の命の価値を感じない。

胸まで海水が浸かる。

何人、何十人もの男が抱いてきた体。まるで物のように、使い勝手のよい相手として扱われてきた体。それでいいと思っていた。誰かが必要としてくれている限りは、私に価値があるのだと思っていた。

漁火が眩しい。涙が零れ、体の震えはさらに大きくなる。
願いと祈りの虚しさを、色も感触も失ったような世界の中で。
全てが終わりに向けて動く時間の中で、私はようやく凍えだしている。
希望が辛い時もある。人が楽しそうに笑っているのを見ているだけで傷つくこともある。

今私は「怖い」「冷たい」とつんざく様な体の叫びが聞こえるのがとても嬉しい。
このまま死ねたらいいのに。このまま海の泡になればいいのに。
突然背中から何かが私に抱きつき強い力で海岸へと引き寄せられた。
それが何かも確認する力がなかった。
砂浜まで引き上げられ、ようやく男の人に助けられたのだと理解した。
「死ぬなら、こういう目立つ場所だと、すぐばれるから、別の場所にした方がいいな」
ガタガタと声を震わせながら「じゃあ、どうして助けたの」と聞くと、
「助けなきゃ俺が生きてる間ずっと後悔する。俺のためにやっただけだ」
「放っておいてよ」
「お、あれたぶん最後の飛行機だけ。東京から来る便。福岡空港に降りるやつだ」
見ると一筋の光りが流れていた。
「放っておいてよ……」

言葉もかろうじて出るほどだった。
「俺も用事があってきたんだよ。嫌な事あったから海でも見て、ぼんやりしようと思ったら、まあ曇り掛けて嫌な光景が目前にありやがる。あのなあ、放っておけっていうけど、俺だって嫌なんだよ。俺だって放っておいて欲しいよ。でもさっきも言ったように君が先客だけど助けないと後味悪すぎるの。目の前に人がいるって、そう簡単なことじゃないんだ。一人のような気がするけど、一人になれないし、一人じゃ生きられないし、誰かに気を使いすぎたり、誰かの強い気持ちに圧力を感じたり、大変だけど、死にたくなる時だってあるし、死にたい気持ちは俺も持ったことあるから、わかる部分はあるけど、人が一人いるって、放っておけ、はいそうですかって、単純じゃないんだよ。君がそこにいっただけで、それだけで重みがあるんだよ。そういう一人の重みのある人間の命が俺の目の前で消えてしまったら、俺の人生がとっても暗くなるから俺は全力で止めるんだよ。わかった？」

重くなんてないのにな、と思っても涙が出てくる。どうしてだろう。先ほどとは違う涙。

空が綺麗に見える。星が回っている。波はこもった音からハッキリと聞こえ出している。まるでレコードの音を聞いているような優しい感覚に包まれている。

さっきの光は福岡空港に降りると言っていた。

夜間飛行は終わる。無事に降りることができたら、また次の朝がちゃんと来るだろうか。

「帰ろうぜ。家まで送るよ」

見知らぬ人の背中に砂まみれでおぶさり、私はずっと降りてきたまどろみに身を任せ目を閉じた。

第十九話「誰かさんと誰かさんが麦畑」

「誰かさんと誰かさんが麦畑」

母がよく歌っていけれど、ワンフレーズ口ずさむだけだった。ネット検索してみると「誰かさんと誰かさん」という歌だった。原曲はスコットランド民謡「ライ麦畑で出会ったら」。

洗濯物を干す時、クリームシチューを作る時、ワイシャツにアイロンをかけている時にだいたい口ずさむ。母に「思い出がある歌なの？」と聞くと、ちょっとね、とはぐらかす。父との思い出かなと思っていたけれど、父は「ドリフか？」と言う。身に覚えはなさそう。

大学に入った私はよさこいの部活に入り、そこで一つ上の先輩に恋をした。でも遠い恋で、咲いている花を遠くから眺め、心を静かにあたためる日々だった。彼女も持ち。叶う恋ではなかった。

先輩は踊りが上手だった。それもそのはず、母親がダンスの先生で教えてもらうことも多々あったという。部活の中では誰よりも上手く、向上心も高かったから部長と、その取り巻きには嫉妬心まるだしの待遇だったから、一年生から入っている先輩は二年間近く隅に追いやられていたのだそうだ。

先輩たちが卒業してからというもの、部活はさらに活気に満ちていった。以前は選抜式だったのが、全員参加型に切り替わったし、振り付けも先輩を中心に、みんなでアイデアを出し合うという形になっていった。

相変わらず先輩の彼女とは関係が切れないまま続いていた。それでもよかった。傍にいられて、一緒に何かできて、秘めた想いを大事にしながら、告白することもなく。そんな日々が幸せだった。

ある日の春先、一人でサイクリングをしている時、メタセの杜近くの菜の花ロードで偶然先輩と出会った。先輩はカメラの趣味があって暇があればサイクリングがてら写真を撮ることがあると言う。先輩も一面の菜の花を見に来たらしい。

学校の中でしか出会ったことがなく、いつも皆と一緒にだったから二人きりというのは何故か緊張した。ぎこちない会話というか、むしろ無言に近いまま走らせる。夕闇が近づき、少しずつ夜が近くなり、帰ろうかという雰囲気の中、先輩は自転車を止めてシャッターを切り出した。

先輩が見る景色、先輩が感じる事、考えていること、全てを想いながら一緒に空気を胸いっぱい吸い込んでみる。菜の花の微かな匂いを鼻腔にくぐらせながら、懸命に何かを切り取ろうとしている先輩の姿に別の純粋さを感じていた。

近づけたようで、近づけない。でも私はこれでいい。

体が、一瞬だけ震える。夕日が綺麗ですね。些細な言葉さえも口に出せない。昼間の鮮やかな黄色がくすんでいくのが苦しい。

「ごめんごめん。綺麗だったからつい。もう暗くなるね。早く帰ろうか。明日からまた講義あるんだろ？」

私は黙っていた。自分を抱くように両肘を抱えながら。

「どうした？」

心配し近づいてくる先輩の顔をまともに見られずに俯く。

「寒いんです。とても、寒いんです」

「大丈夫か？」

肩を両手で握ってくる先輩に顔を向ける。近い。今までで……一番、近い……距離に、いる……。

体が震える。脅えなのか、悲しみなのか、寒さなのか、恐れなのか、正体もわからずに。泣きそうな瞳で先輩を見つめていると、先輩の唇が近づいてきた。

私は覚悟したように、待っていたように、素直に受け入れ、腕を先輩の体に回して抱きついた。

長いような、短いような時間はごちなく過ぎ去って、唇が重なった事実がなかったように私たちは帰った。

先輩が彼女と別れるようなことはなく、口付けを交わしたことに触れるようなこともなく、いつも通りの先輩と私のまま時間は過ぎていったけれど、ただ一つ秘密だけは残った。

「誰かさんと誰かさんが麦畑」

私の中で特別な意味ができた。歌を口ずさむ母を優しい気持ちで今は見ている。

私も、ふと誰もいないところだけれど、独り言のように歌を口ずさむことが多くなった。

第二十話「プライドと生き様」

六十を手前にして結婚を一度もしたことがなく、資産らしい資産もなかった。

田中義明は小さなそば屋の厨房でバイトをしている。週三・四回の勤務。それ以上はもう体がずっしりと重くなって辛くなる。先月別の職場で前のめりにこけてしまい、右肩を強く打ち重い物が持てなくなってしまった。

若い頃は酒、女、煙草、博打も多少はやっていた。それが酒で体を壊し禁酒。生活費を切り詰めなければいけないため煙草も止めた。女と言えば金の切れ目が縁の切れ目。激務のため四十から先はまったくと言っていいほどだった。

高校を出てからは調理師学校に通い、二十歳から調理師として働いてきた。実家が小さな居酒屋だったため、手伝いとして入っていたが、父親は調理師免許を持っておらず格下だと見下して生きてきた。父親に何かを指摘されるごとに「格下」という気持ちが生まれ、鼻で笑っていた。その鼻で「フッ」と笑うことがいつの間にか癖となり、ニヒルでもなく、ただ人を小ばかにしたような笑いを、ことあるごとにする。当然感じが悪い。人に好かれるはずもなく、プライドだけは高かったので群れないことが自分の格式を保つかのような考えでいた。

男は女に媚びるような真似をするのはみっともない。女は黙って男についてくるべきだ。硬い考えが女心の反発を招き、誰と付き合っても長くは続かなかった。特に鼻で笑う癖が付き合う人間全ての癩に障っていたことに気がつかなかった。どこが可笑しいのか理解できない。ただ馬鹿にされているような印象だけが残る。

そんな義明でも小さなホテルの和食の総料理長をやったことがある。朝から晩まで働き詰め。格式の高いホテルならまだしも安く泊まらせる自転車操業のホテルであったから、安月給で使われるだけ使われた。格好のいいものではない。和食の調理人、ホテルの総料理長。肩書きだけは立派そうに見えるが、腕はそこらのバイトより悪い時がある。履歴書上は腕があるように見えるので、四十半ばから他のホテルに移り働いたが、鼻で笑う癖が邪魔し、プライドも高く自分に腕はなくても知識はあるので、他人のちょっとした所業が許せない。ついにはスタッフを邪険にすることから味方もおらず、拳句の果てに反義明派のグループに追い出される形となり、五十を手前にしてバイト生活をし職場を転々とするような生活をしてきた。和洋中全ての職場を経験した。職場を転々とする理由は義明が言うには「あんのところ、俺から願い下げだ」と相手の欠点をあげつらい、自分のプライドを保とうとするが、内容はどこにも結局のところは肩をひそめられ、体よく首になったと表現した方が正しい。

ついには最後に残ったそば屋のバイト生活。ここを首になったら生活そのものが成り立たなくなる。先月四十過ぎの入りたての女性厨房スタッフに「邪魔だ」「またお前か」

と仕事ができないことが嫌で、感情むき出しの言葉を手短に投げつけ、泣かせた拳句、辞めていったのを快く思っていたが、職場のスタッフや店長に釘を刺されたため静かにしていた。しかし今度は以前からいるらしい一回り以上も下の「格下」の男性厨房スタッフが気に入らない。我慢のしどころだが、切れそうになる時があり、自分なりに抑え付けている。

今月から新しい住居に移る。家賃が払えず、より安いところ、月三万は確実に切るところがあったのでそこへ。

食費はバイト先の「まかない」でほとんどを払わずに済んでいるが、さすがに腹が減る時がある。ガスは極力使わずに、食費は最低限にとどめておけるように工夫する。風呂のない生活をしており切り詰めるだけ切り詰めている。それでも体が多少しんどい時にインスタント食品を使うことがある。

ちよど帰り道、銀天街を通った。十年近くはここを通っていたが相変わらずの錆びれよう。その様子を見るたびにみずばらしく感じ「フッ」と鼻で笑っていた。

そういえば、と家には食材が切れていた。安売りのスーパーに行って安いカップ麺でも買えばいいのだが、今日に限って体が重く、そこまで行く気力がなかった。

予備も考えて四つほど種類を変えて看板もボロボロの店でカップ麺を購入した。店員が「あんた顔悪いね。ほら、これおまけしとくから」と餅をひとつつけてくれた。よほど血色の悪い顔をしていたのだろう。店の異例の対応ではあったが、義明はそのことにも気がつかない。「ありがとう」の一言も言わずに黙って金を払い受け取る。

店の看板の横には父親と娘の親子連れの標識。「歩行者専用道路」の意味である。義明がその形に気を止めることもない。子供がはしゃぎ通り過ぎるのを「うるさい」としか思えなかった。

アーケードを出ると太陽が眩しかった。サングラスをつけ、肩で風を切るように義明は歩いて行く。一寸先の生活もわからぬままに。

第二十一話「無邪気な夢を見る時間へと」

いつの頃の自分だったか思い出せなかった。

しかしいつも子供の頃の夢を島田勝也は見る。

決まって公園で走っており、無邪気に、とても胸を躍らせながら、走る先にもっと素敵なことが待っていることを知りながら、どんどん軽やかになり、足も早くなっていく。

緑に囲まれ木々の香りを掻き分けて、学校帰りで、背中に背負ったリュックの重みなど感じないほど、何かに期待しながら、好きな人でも待っているかのように。

勝也は、その夢を見る時、気分が重い。

一人部屋のベッドの上で汗まみれで起き、体の中には疾走感が残っている。

特に休みの日、朝まで悠々と寝ておりカーテンから日の光りが部屋にしみ込んで来る時によく見るらしいことはわかっていた。

休みの日くらいゆっくり休みたいのに、睡眠が夢で中断されることが不愉快なのではない。

今の自分の生活に胸躍るようなことも、血が沸き立つような興奮もまったくなく、仕事に行っては疲れ、もっと休みが欲しいと同僚には愚痴り、休みの日は疲れきった体を休めるために一日中使い、結局のところ職場と家とを往復するだけの生活に成り下がっている現実に対し、希望溢れる子供の頃の夢に焼かれ照らされるのが辛いのだった。

職場に通う途中、夢の中のような子供を見る。

何故、それほどまでに無邪気なのか。大人になったら辛いんだぞ。仕事して食っていかなきゃいけないのに。

恨み節をこぼしそうになって、自分の腐れ具合に溜息すら出る。

それを朝っぱらから出そうものなら、職場に着く前に帰りたくなる。

勝也の現状はここ一年ほどで急激に厳しいものになってきていた。

前社長が副社長と取り巻きに会社を追い出される形となり、会社の一部は前社長が買い取り前社長派たちは離脱。残った社員で立て直そうにも人手不足が深刻な上に、新規事業に乗り出そうとするお粗末さ。挙句の果てには任されたプロジェクトが二ヶ月で結果が出ないからと下ろされ後任をあてられ、勝也はまた新規プロジェクトを任せられるとしている。

新しい社長は経営のセンスがまったくなく、社長の取り巻きもイエスマンばかりで勝也の苦言もまったく通らない。勝也ばかりの責任を追及され、仕事時間ばかりが増える。十三年勤めてきたが三十歳にもなった。将来のことを考えると限界だと感じた。

結婚をしたいと彼女からも言われている。

彼女との子供のことすら考えられず、淀みきった心で憎々しげに目の前の子供を見るようでは、子供を望む彼女との新しい生活も成り立つはずがない。

いつもの帰り道、子供を見かけた。

無邪気だ、と思った。子供の無邪気さが清らかなことのように思えた。大人になればなるほど息苦しい。何かに責められたり追われたりすることが多くなる。大人になればなるほど夢を見られなくなる。

そんな現状が自分に夢を見させるのか、とも思った。今の自分は何かを失いかけている。

ここ数年心が躍ったことなどあるだろうか。希望を感じたことはあるだろうか。道の先には光りを見出し軽やかな足で走ったことはあるだろうか。道すら見失いかけている。

無邪気さは、明るい。どうして輝いて見えるのだろうか。いや、昔自分だって無邪気に物事を考える時期があったはずだ。

勝也は思い出そうとした。公園のベンチに座り、うずくまるように頭を抱えながら。「大丈夫ですか？」

声がした方へ顔を上げると夕陽の眩しさに顔が見えなかった。目が慣れてくると老婆が心配してくれたのだとわかった。老婆、といっても髪が白いだけで随分と肌の張りもよく、背筋も真っ直ぐで、変わっているがお洒落な服を着こなしている。

「大丈夫です……」

次のありがたい言葉を出す前に、服に目を奪われ見入ってしまった。その後老婆と会話するうちに色々話をしてくれた。

孫が次々と服を買い換えるから、捨てるのがもったいため仕立て直しをしている、という。

生地もパッチワークなどを駆使しているため、時折斬新な色使いもあるが、いかにも若々しい色使いで着ている人間を明るく見せる。

その話の間に「もったいないから」という言葉が何度も出てきて勝也は気がついた。

子供は何一つ無駄にしておらず、降り注いだ素敵なものを全て受け取っているから、あれほど無邪気なのではないか、と。だから、希望が見えるんだろう、と。

そんなように思えてきて、勝也は老婆に心の底から「ありがとう」を言い、家路に着いた。

仕事はいつでも辞められる。変わらないことに心を砕くよりも、変えられることに心躍らせていけば、もしかしたらこの会社じゃないかもしれないが、希望は見つかるはずだ、と心に強く思った。

時折見る夢のことを思い出し、勝也は重石が取れたかのような微笑を夜空へ向けた。

第二十二話「新設はねじれを生んで」

金井美莉亜は十年努めた商社を結婚のため退社することにした。

十年も前線で戦って来ると平凡な生活をしていることに酷く違和感があるが、夫となった紳が「子育てはもうお腹の中から始まっているんだ。今は子供のためにも穏やかに過ごして欲しい」とのことで、一日の時間のほとんどを家で過ごしている。

独身時代から仕事も家事も、そつなくこなしてきただけに時間がありあまる。十年も仕事一筋で来たため、趣味らしい趣味もなく、仕事がなくなると頭が真っ白になりそうなほどだった。

ある日ネット検索でガーデニングを見つけ、ゆったりとした時間と自分を合わせるために始めてみたが、思いの外少しずつ植物が育ってくるのが楽しく、生命を身近に感じることに、ある意味感涙さえも流しそうなほど新鮮味を受けた。

結婚と同時に買った庭付き一軒家だけにスペースはある。花のみならず、野菜やハーブなど植えると、また収穫の楽しみが増え、収穫した食べ物で何を作ろうかと考えるだけで楽しくなっていた。

妊娠四ヶ月目から始めたことだったが、二ヶ月ほど経った頃、近所に住む六十過ぎの女性、多恵子に収穫物を御裾分けしたのが苦痛の始まりだった。

多恵子は植物に対しての知識が豊富で、ことあるごとに美莉亜に口出しするようになってきた。それも毎日のように庭を覗いてきて、肥料がどうなの、水遣りがどうなの、収穫後の土の整え方から、間引きや剪定の仕方まで口出ししてくる。

口出しするだけなのならまだしも、植物が可哀想、この程度の知識で扱ったらダメになる、こんな誰でも知ってることもやってないなんて等々、美莉亜のやり方を蔑むようになってきた。

ほとんど悪態すれすれの言動に、さすがの美莉亜も怒り、盾突いたが、そこからさらに多恵子の行動はエスカレートし、私が正しいことを教えてあげているのにあの人は自分の間違いを認めず逆に私を怒鳴りつけたのだ、あの人は少しストレスで苛立っているから気をつけたほうがいい、などと、近所の人間に噂を流すようになった。

それを止めるように説得しようとしたが、多恵子も「事実を言ってるだけですけど」と聞く耳持たない。

我慢の限界を超えた美莉亜は紳にも相談したが「その人の言うとおりにすれば、大人しくなるんじゃないのか？」と爆発しそうな心を軽く扱ったことに、ついに我慢していたものが噴出し、左頬を思い切り平手打ちをして涙ながら怒鳴った。

「あなたは穏やかな生活を約束してくれるんじゃないかったの！？ 私確かにガーデニングとか素人だから間違ってることしているかもしれないけど、それは馬鹿にされて、周

困の人におかしいかのように言いふらされるまでのことなの!? こんな状態じゃ、私ちゃんと子育てできないかもしれない……」

初めて紳の目の前で激昂した美莉亜を長々と慰めてはいたが、紳の言葉は何一つ美莉亜には届かなかった。

そこから二人の間は何かごちなくなり、一枚薄い壁を挟んでいる状態になった。

妊娠八ヶ月目、河内藤園の藤が咲き誇っており、二人ででかけた。園内を歩いていると、ツイストパンのような幹に見事に垂れ下がった藤の木が目の前に現れた。

多恵子の一件は、あちらの家族に紳が話をつけてきて納まっていた。近所に住んでいる限りは、また言ってくるかもしれない不安が美莉亜にはある。

藤も見事だったが、美莉亜はねじれた幹に心奪われた。

複雑にねじれても、藤は上へと伸びてシャワーのように花を垂らしている。

――大事に育てれば、花は咲く。

「あなたも、頑張ってるんだね」

美莉亜は紳に振り向き「手を繋ごう」と、そっと手を伸ばした。

紳の手に触れた途端、赤ちゃんが美莉亜のお腹を蹴ったのがわかった。

第二十三話「向こう岸までが遠く」

向こう岸に渡るには労力がある。

川の流れが速かったら大変だし、流れが穏やかに見えても深さがあると、川底の地形によって流れが妙にうねる場所があり、泳ぎの達者なものでも足が取られたりする。

浅く見えても時に溺れる時だってあるから、見えない場所にこそ想像できない何かが潜んでいるものだ。

見知らぬものを眺める時、俺たちは想像をする。懸命に想像をして、例えば向こう岸にはこちらとは別の何かがあるのだと思ひ込む人もいる。

時代は人に便利さをもたらし、向こう岸への妄想を馬鹿らしいものへと変えた。

橋のおかげであちら側とこちら側を自由に往来できる。車の窓を開けて潮風を感じながら、若戸大橋を走っていく。

潮風が鼻につく度に首元が苦しくなって、黒いネクタイを緩ませる。黒いスーツにガッチリ身を固め、夏の暑い時だと言うのにスーツを脱ぐのすら忘れていた。

まだ二十七歳になったばかりの部下の男だった。急性心筋梗塞で仕事中に、皆の、俺の目の前で死んだ。

猛暑日、オフィスのクーラーも経費節減のため抑え目にしてあり、うだるような暑さだった。

未だに古い理屈が会社内を占めており、気合だとか根性だとか、やる気だとか、精神的な理由で仕事の出来栄を説明するくらいだった。俺も立場上、精神論に染まりきっていた。

自殺の多い国だと言われている。交通事故が多いと言われている。だが俺はどちらも見たことがないし、知人でもない。

だからなのか、人が目の前で死ぬなど想像したことがなかった。

その時俺がしたことと言えば「大丈夫か？」と声をかけ「大丈夫です」と答えられたことだけで何もせず放っておき、約十分後に気を失う彼を見て「脱水症状でも起こしたのか？」程度の安易な考えで、なおかつ「こんなことで倒れるなど情けない」とすら感じたほどだった。

俺は彼の同僚の若い女性が甲斐甲斐しく介抱している姿をぼさっと眺めていただけだった。

俺は一体どこにいたのか。

人間らしいことを一つもできずに、何の想像力も働かせずに、無下に命が消えていく傍で突っ立っていた。

俺は向こう岸にいるのか、川の中にいるのかすらわからなくなりそうだった。

そして走っているはずなのに、いつまでも若戸大橋を渡り切れない。

強い日差しが黒のスーツに染み込み、燃えるように熱くしている。
遠い。いつまでも向こう岸が見えなかった。
ただ一つ、もう会社にはいられないとだけ漠然と思っていた。
思春期にさしかかる息子と娘を持つ父親として、その前に一人の人間として、人間らしいものを取り戻さなければならなかった。
ようやく橋を渡りきった時、「すまない」という言葉と共に涙が出た。

第二十四話「門司港駅の怪人」

まことしやかに、うわさが立った。最初はとても曖昧だったが、徐々に見る者も多くなった。うわさが尾びれをつけるものとは明らかに違う。

門司港駅の駅員の間で、ホームに日に二度、赤いコートの女が立つとのことだった。何故一乗客のことが噂になったかと言うと、春夏秋冬決まってコートを着ている、と言うのだ。だが夏近い頃と、秋ごろには出てこないのだと言う。

冬や春先、秋の終わりならばコートも気にもならない。だが夏の真っ盛りでも赤いコートを着ているのは不自然すぎる。

改札にいた駅員の中には「真夏にコートなんておかしいだろ。それに真っ赤なら絶対わかる」と言う人もいるほどだ。

うわさも、どうにも的を射ない。「北を見て悲しそうな目をしている」と言う、うわさもあれば、「南東あたりを見ながら怒っているようだった」と言う、うわさもあつた。

このうわさに興味を持った男がいた。怪談話を収集している自称怪談師の太った若者だった。その若者へインターネットで知り合った人間がうわさを話したため情報収集に来たのだ。

その若者、怪談つながりで妖怪のことも少し調べていた。海御前。「あまごぜ」とも「うみごぜん」とも言う。北九州にいる有名な妖怪。壇ノ浦の戦いで破れた平教経の妻、母親だと言う説もあるが、海御前が河童の女親分になっており、墓の場所が南東の大積にあると知っていた。

怪談師は他の特徴を聞いてみた。直感だけでは頼りない。「そう言えば僕が見た時には蟹が足元に落ちてましたね」

と一人だけ言う駅員がいた。「間違いないですか」

と念を押すと「ううん、たぶん。蟹っぽかったですけど。でも違ったような」後日写真を持って行き確かめた。通常の蟹は足が十本あり、タラバガニは八本だがあれはヤドカリの仲間で特別だ。だがその蟹は四本だったと言う。足が少ないために駅員も迷った。

しかし間違いなく平家蟹だった。他の足が短く際立って四本延びている。その甲羅は鬼瓦のように怒っているように見える。

壇ノ浦で海に沈んでいった平家の兵士たちが、蟹にその姿を変えたとの逸話から名前がついた。

だが何故門司港駅なのか。

そのヒントは潮流にあった。

関門海峡は潮の流れが激しく変わる。

日本海側へ、瀬戸内海側へと、日に四度も変化する。壇ノ浦の戦いもその潮流の変化のせいで、平家の敗因になったと言われている。

怪談師は想像した。

正室、もしくは母親は潮の流れで大積まで流れた。そして「海御前」と呼ばれ墓を建てられた。

側室は平安時代からいた。だから側室も当然いたであろう。正室だけとは考え難い。きちんとした身分のものであれば墓も建てられたであろう。もしやその側室の一人が敗因を悟った平氏たちの入水の後、潮の流れに素直に従わずどこかの陸地に引っかかり激しい潮流の変化で門司港あたりに辿り着いて、誰にも供養されることなく無念のうちに死体も腐り果てたのではないかと。

それを怪談師の中で確証付けた例もあった。話から見えたのは、蕎麦の白い花が咲く時期は一切見られない。今蕎麦は二期作になっている。

源氏の色は白。平氏の色は、赤だった。

赤いコートの女、現代に今尚残る怪異か。

では、傍に落ちていた蟹はどうだ。

きっと、その側室を思って傍にいた武者の、たった一人なのであろう、と考えた。

怪談師が、怪異を謎解き、語るようになってからは赤いコートの女は現れることはなかったと言う。

KitaKita物語

著 光野 朝風

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
